明石の史跡（１２）明石大路川心中

あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘の響きの 聞き納め。寂滅為楽と響くなり。（近松浄瑠璃集上）

読者をして、『曽根崎心中』のクライマックスへいざなう、名台詞である。近松の名声の確立とともに、「心中」が社会現象となる。初演が大坂（元禄１６年５月７日より竹本座）であったためか、「京大坂の風」とまでいわれた（窓のすさみ）。数字の根拠は不詳とはいえ、その年大坂での心中は、４６組を数えた（元禄世間咄風聞集）。「中にも北野辺及び梅田辺、まいよまいよの心中にて、所の騒動大方ならず」（明和雑録）という状況になり、梅田界隈では、それらしき者を見つけ次第追い払っている。

幕府でもこの状態を放置していたのではなく、享保７年（１７２２）、心中者の死体を取り捨てとし、生き残ったものに対しては、加害者と認定するのみならず、日本橋にて３日間さらし者にした。それでも根絶はむつかしかったようである（徳川禁令考）。大坂に近接する当地でも、その影響の一端を確認できる。

寛保３年（１７４３）９月２６日、明石での心中事件発生により、大坂から検使の役人が２名、兵庫の町に到着（兵庫岡方文書７－３）。翌日に現地入りしたであろう。事件現場は大路川（おおじがわ）という。心中した男女の身元は不明。問題の現場（大路川）はどこなのか。明石川右岸の森友（神戸市西区）の王子水路の取水口を起点とし、県立明石西公園の西方で分流。ＪＲ神戸線のところで合流。市立衣川中学校の西で、下水路に吸収され、川ではなくなり、そのまま海へ向かう。大半が暗渠化されており、川筋の確認は困難がともなう。大道東公園（大道１丁目）のすぐ西では、かつて幅２ｍ・水深１ｍはあったという（大路川の流路については、兵庫県芸術文化協会の田中弘子氏の御教示による）。

大道東公園

日本歴史学会会員 茨木 一成